

年の暮れに天満の商店街を抜けて夫のお墓に向かった。

ビニール袋や紙袋を提げて足早に行き過ぎる人の中をゆっくり歩くと、自分が大群を逆行する一匹の鰯に思えてくる。行きつけの花屋で足を止め、墓花を一对注文した。小柄な若い女店員が手早く花を新聞紙に包みながら、

「いつも有り難うございます。今年最後のお参りですか？」

と、愛想のいい声を出した。私は頷いてお金を払い、花屋から程近いお寺へと歩いた。お墓はひっそりとしている。手桶に水を汲み、墓石を清め、草をむしった。風でローソクの火が何度も消え、ふっと哀しくなった。

「今年で丁度十年ですね……」

私は夫に語りかけ、お線香の煙のなかで、数珠を手に短い経を上げた。

「たった二年で私を置いて、逝ってしまったなんて……。私はこのお墓には入りませんから、それから前の奥さんと仲ようして下さいね」

夫の納骨をした時にはこんな気持ちになれなかったのに……と、十年の歳月を思った。

桶を返しに水汲み場へ行くと、若い男性の後ろ姿が見えた。年末に若い人がお墓参りなんて偉いなど感心していると、その人が振り返った。

「あっ」

二人同時に言い、あとの言葉が続かない。

十年前に婚家を出たまま逢うことのなかった、夫と前妻との一人息子だった。

短い沈黙のなかで、私は息子の歳を数えた。今年で三十六歳になる。

「今日はお父さんの月命日やね」

「はい……お久しぶりです」

息子は重い口を開いた。一緒に暮らしていた頃と変わっていない。お互い何を話していいのかわからなくて、気まずい空気が流れた。

「そしたら、わたし、行きますね」

「あの……ちよつと待っててもらえますか？」

息子は私を引き止め、お寺の外へ走って行く。私は手桶を戻し、息子を待った。

再婚したのは十二年前の春だった。四十半ばになって、一人で生きようと決めた矢先、会社の上司に紹介されたのが夫だった。

奈良の郊外で、姑や血の繋がらない息子との、どこかいびつな生活が始まった。

茶道を教える八十歳の姑は仕事を辞めた私に家庭を任せると、穏やかな傍観者になった。夫と相談し、繊維会社の営業をしている息子には、「下宿のおばさん」と割り切って接した。すると、少しずつ息子の方から寄り添ってきてくれた。不安を感じながら飛び込んだ結婚生活はますます

のスタートを切った。

朝、出勤する夫は家の前の公園を横切り、色づき始めた唐楓の下で立ち止まる。そして、玄関で見送る私に手を振った。いつも同じ場所で振り返る夫の姿がおかしく思える日もあったが、それが夫の色褪せない愛情に思えて、私も大きく手を振り返した。心が熱く迸った。

ある晩、遅く帰った息子が一人夕飯を食べているのを台所のカウンター越しに見ていた。箸を置いた息子は私に気づかず、自分の財布をのぞいて溜め息をついている。

―給料日前で、お小遣いがないんやろな―

私にも覚えがあった。咄嗟に、私はキッチンの抽斗から財布を出し、一万円札を抜いた。カウンターの隅のティッシュケースに手を伸ばし、お札を包むと、息子に差し出した。

「これ、遣つといたらいいよ」

「あつ、財布のぞいてたん、見られてました？」

「うん、ため息まで聞こえてきた」

初めて息子と大声で笑い合った。

「助かります。三日後にはきつと……」

「はい、はい」

と応えた私に心の声が聞こえてきた。

―下宿のおばさんがしたらあかんかなあ―

五分ほどで息子は赤ちゃんを抱いて戻って来た。背の高い息子の後ろに小柄で可愛い女の人が出て、その人も赤ちゃんを抱いている。

「家内のあき子です。今年の夏に双子の男の子ができたんです」

息子の声に、あき子さんは笑顔で深々と頭を下げ、私も静かに頭を下げた。

「おめでとう。よかったね」

「この子が『ゆう』で、家内の抱いている子が『そう』です」

寒風のなかで、赤ちゃんはよく眠っている。

私は十年ぶりで逢った息子と、嫁への説明のつかない思いで言葉に詰まった。

何て不思議な感情だろう。

「抱いてやってもらえますか？」

思いがけない息子の言葉だった。赤ちゃんを抱くと、お乳の匂いがふわっと私を包む。子供を産んだことがないのに懐かしかった。

「お元気だね」

声がかすれないように大きな声で言った。

息子たちが何か言う声もう聞こえない。

私は二人に背を向け、足早に立ち去った。